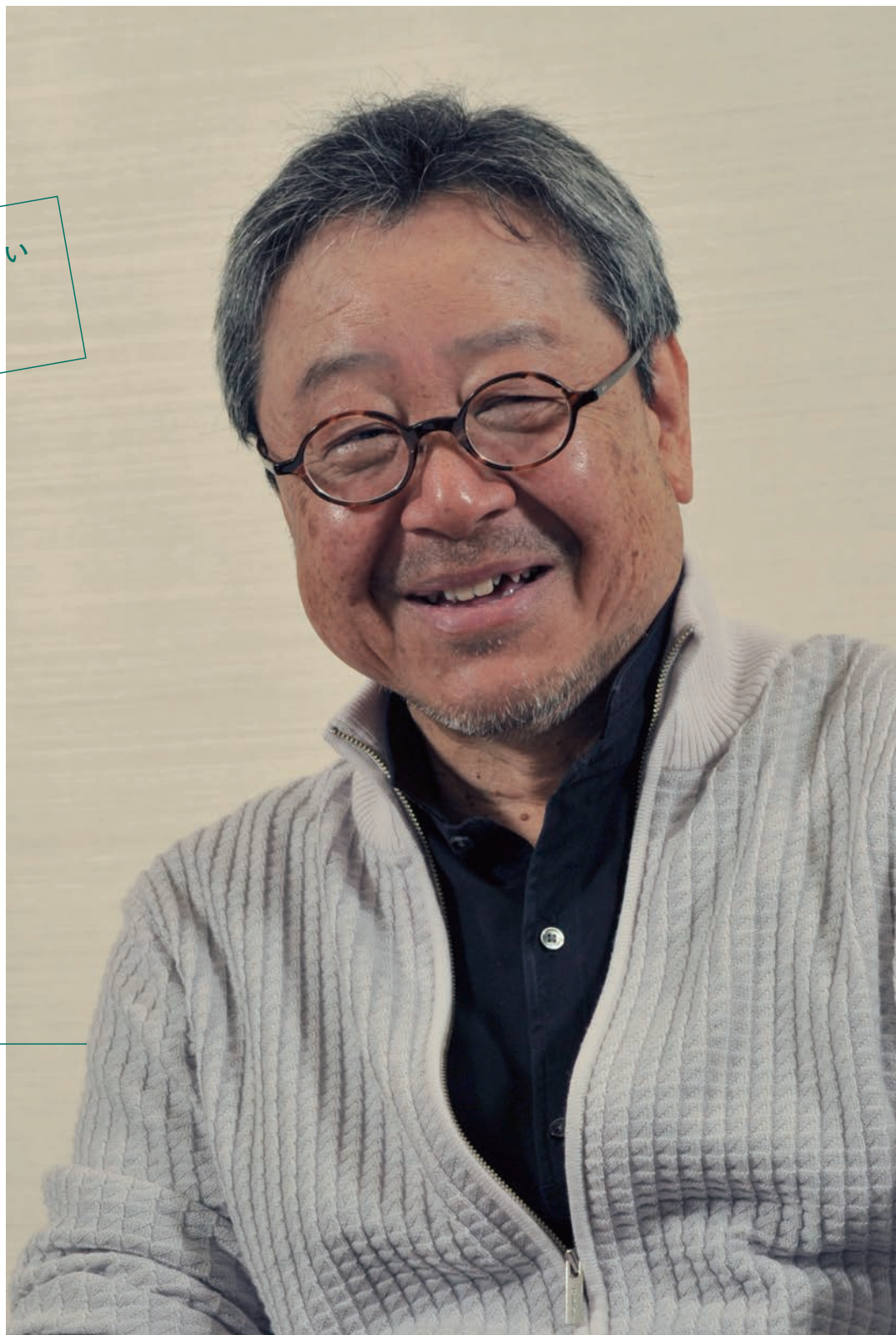


「苑」この人に会いたい
作家
夢枕 獏さん (64 歳)

夢枕 獏



「どの作品も根っこの部分は同じ。

人間の一生は短いので、自分の中にあるネタを使い切る前に
寿命が尽きるような気がします」

映画・ドラマ化された「陰陽師」をはじめ、
長いものは 30 年以上続く人気シリーズを数多く生み出し、
12 本の連載を抱える売れっ子作家。
釣りや陶芸などの趣味と両立しながら第一線を走り続ける、夢枕獏さんに迫った。

小学生の時・父と母と弟と
箱根の明神力岳へ



小学校の時・夏休みの工作の宿題でロボットを作る

幼少時代から物語を頭の中で構築

穏やかな語り口から、優しい人柄と作品への情熱が垣間見える夢枕獏さん。代表作のひとつ「陰陽師」は四半世紀を超えて続く人気シリーズで、野村萬斎が主人公の安倍晴明を演じた映画、稲垣吾郎が主演したテレビドラマが記憶に残る人も多いことだろう。夢枕さんは、1951年、神奈川県小田原市で生まれた。

「頭の中で物語を作り始めたのは、字を覚えるより前ですね。当時はテレビがないですから、親が僕を寝かしつけながら即興でいろんな話をしてくれて、話が行き詰ったり、適当に話を終わらせたりすると、「その続きはどうなった」っ



中学生の時に友人たちと山へ

てしつこく言う子供でした（笑）。その繰り返しで「続きはない」と言われると、僕が続きを作って話していたんです。

小学校5〜6年ぐらいからノートに小説を書き始めて、中学に入ってからガリ版で刷ったものに書いていました。内容は地底旅行とか冒険物が多かったです。小説を書くにはどうしたらいいかなんて何もわかってない頃ですよ。高校では文芸部を作って、同人誌のようなものを何冊か出していましたね。筒井康隆さん、星新一さん（SF作家）の影響をモロに受けた世代で、ショートショートなどを書いたりしていました。大学（東海大学文学部）に入った頃から意識しているんものを書いていましたが、大学を

卒業するまでは「作家になりたい」というニュアンスで、「なろう」とは思っていなかったですね」

様々な体験が肥やしになった20代

大学卒業後、希望する出版社の就職に失敗。紆余曲折しながら、「作家」という宿命の仕事へと導かれていく。

「大好きな絵本「八郎」を出版する福音館に入って、絵本を作りながら小説を書きたかったんですね。22の時から山小屋やスキー場で働いたり、小田原郊外で下水道の土管を埋めたり、引越し屋、鉄工所などいろんな仕事を転々として、お金ができると小説を書いていまし



大学生の時・東海大学で

た。「書く以外の仕事では金を稼がない」と決めたのは30で結婚した時ですけど、

「作家になりたい」でなく「なろう」と思ったのは25、26の時ですね。当時、作家がダメならカメラマンという選択肢もあった、その方面も行けそうな感触はあったのですが、やっぱり書くのが一番好きでしたし、すでに新卒で就職した人たちから4年遅れていたわけで、「もう他のものにはなれない」という思いがありました。

「いつかやればできる」という思いはみんな心の中にあると思うんですけど、「いつかかっていつ？」という話になるんですよ。カメラも機材も全部売りとばしてお金を作って、雨戸も全部締め切った部屋に2、3ヶ月こもって150枚ぐらいの長めの小説を書いたのが、「全力を挙げてやらなければいけない」と思っ腹をくくった時でした。

苦難の時代といえ全部そうだった気もするし、結果論でいえば今に至るまでの肥やしになっていて、悪い体験というのは我々の職業にないんですよ。家が焼けたら、おやじやおふくろを亡くした体験、若い頃にはヤクザに脅されたこともあったけど、マイナス体験が全部財産になる職業なんです。ただ、物を書いて生きていこうと決めたはいけど、「それで本当に食べていけるのかな、死ぬまでもつかな」という不安はずっとありましたね。

好きな形から派生する作品の数々

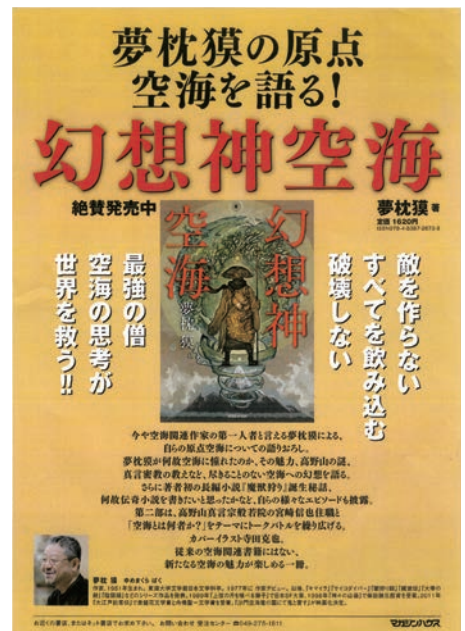
26歳の時に「カエルの死」でプロデビューしたものの、アルバイトで生計を立てていた夢枕さん。31歳で発表した「キマイラ」が若者の読者に支持され、33歳の時の「魔獣狩り」で一躍ベストセラー作家となり、どちらも現在も続く人気シリーズとなる。38歳の時、「上弦の月を喰べる獅子」で受賞した第10回日本SF大賞を皮切りに、多くの賞を受ける大作家へと飛躍。非常に多作で、書くジャンルも伝奇小説から山岳小説、エロスやバ

イオレンス、時代物の冒険小説まで多岐にわたる。

「僕は、A地点からB地点まで行っ世界のために良き物を手に入れてくる、という話が好きなんです。僕のいろんな要素がシンクロする部分なんです。そして途中の旅は長ければ長いほどいいし、混乱があればあるほどいい、というのが僕のスタイルみたいな感じです。

空海を描いた「沙門空海唐の国にて鬼と宴す」という本があるのですが、これには西遊記の要素がプラスされています。西遊記は、玄奘三蔵と悟空、沙悟浄、猪





八戒が天竺まで行って經典を持つてくる話。物語の構造でいうと、A地点からB地点まで行って何か素晴らしいものを取ってくる話ですね。日本から唐の国まで行って密教を持つて帰ってきた空海もまさしくそうで、そのはるばるとした距離や時間、空間なんかを、実際にシルクロードを歩いている感覚で書いているんです。

他の本も構造的には同じで、格闘小説は世界一強い男になるために、途中に立ちふさがる「西遊記」で言えば妖怪であるライバルをやっつけてチャンピオンベルトまでたどり着く話なんです。いろんなものを書いていきますけど、根っこの部分は同じ。僕の中では同じところから生えてきた枝であって、違和感なく並列していますね。人間の一生は短いので、自分の中にあるネタを使い切る前に寿命が

尽きるような気がします」

映画化される「神々の山嶺」秘話

来年、第11回柴田錬三郎賞を受賞した山岳小説「神々の山嶺（いただき）」が、「エヴェレスト 神々の山嶺」のタイトルで映画化（キャストは岡田准一、阿部寛など）される。命がけで山に挑む男たちを描いた山岳小説の最高峰と名高い、夢枕さんの代表作だ。このインタビューが行われた4月、夢枕さんは映画の撮影現場に立ち会うために訪れたヒマラヤから帰ったばかりだった。

「読者の的には少し異色かもしれないですけど、自分的には本道の部分なんです。20代の初期の作品集はほとんどが山のファンタジーですし、デビュー直後は山の話が多かったんですよ。「魔獣狩り」

という伝奇バイオレンスがおそらく世間で認知された最初の作品なのですが、これも元々は山に登る話ですから。「神々の山嶺」を書こうとアレنجジしていたら「魔獣狩り」になってしまったので、元々は「神々の山嶺」の姉妹作品なんです。山が好きで10代から山に登っていて、23でヒマラヤに行った時から「山の小説を書こう」と思っていたんです。そこからどういう手口があるか考え始めて、20代の時に編集者と「書く」という約束をしたのですが、「やっぱりエベレストのベースキャンプまで行かないとダメだな」という思いがあって、時間がかかってしまいました。実際にネパール側のベースキャンプまで行くと、「中国側も行かない」と思ってた行ったり、あとはカトマンズやいろんな場所取材をしたり、日本の山についても調べたり。書き出すまでに10数年、書き始めてから5年かかりましたね。

もっと架空の話にできると思っていたのですが、ストーリーを作り始めた時、山というのはすべて登られて記録が存在していることが壁になったんです。ある天才的なクライマーを設定した時、どの山を何日で登ったのか、あるいはどの壁を何時間で登ったのかを書かなければならない。そうすると、すべて架空の山や壁を設定するわけにいかないし、谷川岳に登るとか現実のものをちりばめていかないと読者に伝わらないんです。それで

interview 苑



30代の時・アンナプルナのベースキャンプで

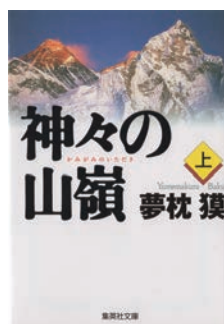


40代の時・「西遊記」の取材で天山山脈へ

現実の山をある程度ベースにすると、現実の人物の記録が存在するわけですから、モデルを使わざるをえなくなる。だから1975年の時代を設定して、過去の話を書いているんです。モデルを使わざるをえないという結論まで何年もかかって、結局、森田勝と長谷川恒男というクライマーをモデルにしたのですが、そういう目で探すとまさにぴったりの二人でしたね。

仕事と両立しながら趣味を楽しむ
山登り、釣り、陶芸、格闘技観戦、漫画、書など、夢枕さんは趣味が多彩であることでも知られている。中でも書は趣味の範疇を超えた腕前で、年に2回、講師として沖縄県立芸術大学と東京藝術大学で書道の講義を行っている。

カラカタルという山のピークまで行つたのですが、空気が日本の半分なので辛くて。昔だったら頂上に登りたいと思つたでしょうけど、もう頂上はいいかない感じがしたね（笑）



50代・アラスカまでキングサーモンを釣りに

奥多摩で釣った70センチの大イワナ



「みんな好きですけど、どれも一人前以上というものはないですよ。どの分野も自分より詳しい人はいっぱいいるし、その道のプロにはかなわないですよ。単に好きなのでいいから。今はあまり山へ行っていないので、山に行っていた時間が釣りに替わっていますね。鮎釣りが多いので、よく行くのは四国。昔は一人でやってましたけど、今は知り合いが引越して住んでいるので、一緒に仁淀川や安田川、海部川、野根川とかに行きますね。

陶芸は、飛驒の山中に作った釣り小屋に陶芸の設備を入れていて、窯とろくろが2つずつあるんです。釣りに行くと、仕事を打ち込みながら毎回7つぐらいを目途に作っているんです。ロクロでやると同じものがたくさんできるんですよ。だから基本、手作りで面白いものや、反則技ですけど、作品に即興で書いた文章を入れるということを意識的にやっています。

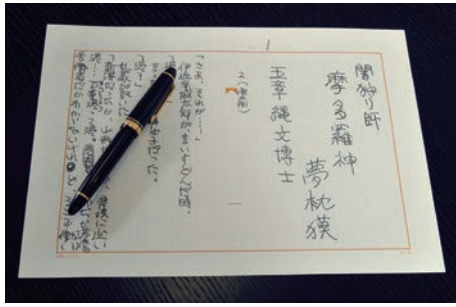
僕はどこでも原稿を書くんですよ。だから山や釣りに行っている間も、朝や夜に宿で書くだけでなく、タイミング上、仲間と一緒にいかないダメな時は釣りの現場まで行って、車の中や河原の石の上で書いています。だから釣りに行くから原稿を減らすということはないですね。原稿はずっと手書きです。パソコンだと釣りのベストに入れる場所がないし、川の中に入るのも大変だし、そういう意



「遊」という字。勢いでいっきに書く



時々書いている



味でも手書きは紙とペンがあればいいので便利なんです。万年筆は同じメーカーの同じものを旅行用、1階用、2階用の3本用意してますね。僕は書く速度が速いのと、旅先に持っていくために小さい原稿用紙を使うので、3行ぐらい書く間に乾くように速乾性のインクを使っています。この原稿用紙を一冊を持っていけば、2泊3日ぐらいは大丈夫です（笑）

エネルギーの原動力は「好奇心」

現在、夢枕さんが抱える連載は12本。4年目のもの以外はすべて10年以上、何本か30年以上続いている作品もある。そのエネルギーの原動力はどこにあるのだろうか。

好奇心だと思うんですね。書く時は「まだこれは誰もやってないだろう」と思って書いているんです。思いついた時はまだ誰もやっていなかったけど、今はいろんな人がやっている、というものは捨ててますね。

以前、50になったら休もうと思ったんですよ。そしたら忙しくて休めなくて、60になったら何が何でも休もうと思っていたら、今度は「1年休んだら書けなくなるんじゃないか」という恐怖感が出てきたんです。それで休まなかったのですが、惰性というのはある意味、非常に貴重な武器なんです。12本がずっと継続しているからそのままやってこられた

けど、1本ずつ好きな時に書いて1冊になったら出す、という形だったら4分の1ぐらいの量しか書けないんじゃないですかね。

30年書いた物語が終わる時というのは、それはもう快感ですよ。女性の作家に「猿ちゃん、泣くんだった？」って笑われたりするのですが、僕は書きながら泣くんですよ。特にラストは自分の作ったストーリーに入り込んで、全員の登場人物で泣いてます。泣かない人についてはなんでみんな、一番おいしい快感を味わわずに長編を終わらせてるのかなって思いますね（笑）

今後は、たぶん今やっている仕事を回していくだけで手一杯だと思います。だから、これからは「これが最後になると思う」と担当者に言うようにしているんです。今やっているところとそのまま次の連載をやるとしても、それが終わったらもういい寿命になっていると思います。趣味でいえば、陶芸はようやく自分の好みと技術がわかってきたので、それを総動員して納得のいく作品をひとつずつ作っていかうと思っています。書も10年ぐらいやってようやくいろんなことがわかってきたので、一回どこかで展覧会とか展示会をやってみなさんにお披露目したいなと思っています。仕事も趣味も、今やっていることの中で新しいことを目一杯やっていきたいですね」



自宅にある陶芸部屋

これはぐいぐい呑みと自ら名づけた
ぐい呑みと酒器



陶芸をやっています。
一輪ざしとぐいのみ

写真提供：夢枕猿事務所